

若山牧水全集

第九

若山牧水全集

第九卷

雄鷄社刊

若山牧水全集 第九卷

昭和三十三年十二月三十日發行

著者若山牧水發行者武内俊三印刷  
者草刈親雄印刷製本所東京都新宿  
區市ヶ谷臺町一番地中央精版印刷  
株式會社發行所東京都中央區日本  
橋江戸橋一丁目七番地株式會社雄  
鷄社電話千代田(27)二七九一、二番  
振替東京二六二五五番

定價六〇〇圓

編集・校訂

若山喜志子  
大悟法利雄

落丁、亂丁の際は  
お取換えいたします。

# 目次

## 小説

|    |      |     |     |
|----|------|-----|-----|
| 一  | 家    | ……… | 三   |
| 姉  | 妹    | ……… | 一九  |
| 蝙蝠 | 傘    | ……… | 四三  |
| 古い | 村    | ……… | 六四  |
| 狐か | 人か   | ……… | 七   |
| 麥の | 秋    | ……… | 八五  |
| 若き | 日    | ……… | 一三七 |
| 或る | 死んだ男 | ……… | 一五三 |
| 老  | 人    | ……… | 一九七 |

# 長 詩

日蔭にてうたへる歌……………二三

死か藝術か……………三九

有明の月も無し……………四四

我が椿の少女に與ふる歌……………四八

失 題……………五一

雨 三 題……………五三

冬 の 朝……………五五

繪 具……………五八

松 の 雫……………五九

## 小 さ な 鶯

ちひさな鶯……………六三

春 の 雨……………六四

たんぼぼ……………六六

雲 雀……………六六

## 童 謠 補 遺

|            |     |
|------------|-----|
| 春の日向……………  | 二七〇 |
| 櫻眞盛り……………  | 二六八 |
| 櫻散る散る…………… | 二六九 |
| 螻のねぼけ…………… | 二七〇 |
| 蟻……………     | 二七一 |
| 夏のけしき…………… | 二七三 |
| 富士の笠……………  | 二七三 |

|             |     |
|-------------|-----|
| はだか……………    | 二七五 |
| ダリヤ……………    | 二七四 |
| 秋のとんぼ……………  | 二七五 |
| 百舌鳥が一羽…………… | 二七六 |
| 雪よ來い來い…………… | 二七六 |
| 冬の畑……………    | 二七七 |
| 八兵衛と兎……………  | 二七八 |

|                    |     |
|--------------------|-----|
| さアさア學校へいそぎませう…………… | 二八五 |
| 大根車……………           | 二八五 |
| かくれんぼ……………         | 二八六 |
| 親烏子烏……………          | 二八七 |
| よちよち歩みの良雄さん……………   | 二八八 |
| 百姓とかがし……………        | 二八九 |
| 雁が來た……………          | 二九〇 |
| 雪よこんこ……………         | 二九一 |
| 雛 雀……………           | 二九三 |
| ひとりあそび……………        | 二九三 |

|                |     |
|----------------|-----|
| 梅の木……………       | 二九四 |
| 山で拾うた胡桃の實…………… | 二九四 |
| ゐねむり……………      | 二九五 |
| 天の河……………       | 二九六 |
| 泣蟲毛蟲……………      | 二九七 |
| 道ばたの鴉……………     | 二九八 |
| 向うの磯に……………     | 二九八 |
| 夏野となれば……………    | 二九九 |
| 魚のとぶ海……………     | 三〇〇 |
| 親鳶子鳶……………      | 三〇一 |

まき子さんのお乳……………三〇二

田舎に來ぬか……………三〇三

おほ寒小寒……………三〇四

落 栗……………三〇五

殘 雪……………三〇六

梅の花のお土産……………三〇六

たろさんの足袋……………三〇七

山の向う……………三〇九

寒 鴉……………三〇九

雪よさらさら……………三一〇

蛙……………三一一

赤ちやんの夢……………三一二

蛙の親子……………三二三

小 舟……………三二四

蚊帳つり……………三二五

涙ぶくろ……………三二五

富士の初雪……………三二八

栗の皮むぎ……………三二九

青 い 服……………三三〇

野焼山焼……………三三〇

春と鳥……………三三二

お 天 氣……………三三二

子 守 唄……………三三三

犬の尻尾……………三三四

ひたきの鳥……………三三四

おやつ時……………三三五

ねむりの神様……………三三六

水菓子屋の秋……………三三七

おもだかの花と蛙……………三三八

夢になりたや……………三三九

お晝の汽車……………三三〇

墓の口と手……………三三一

栗のいが……………三三二

蜂にさされて……………三三三

浮 坊 主……………三三四

左様なら海よ……………三三五

かうもり……………三三七

どの木にとまつた……………三三八

果 物……………三三九

晴れた朝……………三三九

|                |     |
|----------------|-----|
| 蟬とり……………       | 三四〇 |
| 足のない鳥……………     | 三四一 |
| 郭公……………        | 三四三 |
| めだかときやうだい…………… | 三四三 |
| 曲馬を見ながら……………   | 三四九 |

|              |     |
|--------------|-----|
| 汽車……………      | 三四六 |
| 梅と椿……………     | 三四六 |
| 春の漬べ……………    | 三四七 |
| 柿の花石榴の花…………… | 三四八 |
| ちんちくりん……………  | 三四九 |

## 短唱その他

|                  |     |
|------------------|-----|
| 蛇と落葉……………        | 三五三 |
| 舟唄三題……………        | 三五六 |
| 宮崎高等農林學校校歌……………  | 三五八 |
| 三春實科高等女學校校歌…………… | 三六〇 |
| 沼津市制五周年祝賀の歌…………… | 三六一 |

## 初期の作品

|              |   |     |          |     |
|--------------|---|-----|----------|-----|
| 雷            | 雨 | 三五五 | 初夏日記の一節  | 三六八 |
| 二            | 句 | 三六五 | ほととぎす    | 三六九 |
| 春の山越         |   | 三六五 | 露の野      | 三六九 |
| 同生菊地君の龍の圖に題す |   | 三六七 | 夏の曉      | 三六九 |
| 三            | 句 | 三六七 | あかつき     | 三六九 |
| 夕べの思         |   | 三六七 | 野守日記     | 三六〇 |
| 吉野拾遺を読む      |   | 三六九 | 一        | 句   |
| 餘            | 寒 | 三七一 | 秋くさ      | 三六二 |
| 俳            | 句 | 三七一 | 發刊辭      | 三六八 |
| 秋            | 風 | 三七一 | 新春賦      | 三六九 |
| 曉の山路         |   | 三七一 | 春        | 潮   |
| 野の朝          |   | 三七一 | 肥豐の旅     | 三六九 |
| 落            | 葉 | 三七一 | 大分地方旅行日記 | 三六七 |
| 夕月集          |   | 三七一 | 野外演習     | 四〇一 |
| 正            | 月 | 三七五 | 山崎校長の遠逝  | 四〇二 |
| 繪はがき         |   | 三七五 | 一        | 句   |
| 春の水          |   | 三七六 | 早稻田より    | 四〇三 |
| 水ぐるま         |   | 三七七 | 朝        | 顔   |
| 四            | 句 | 三七八 | ゆく雲      | 四〇七 |
| 三            | 句 | 三七八 | 武藏野      | 四〇九 |

# 自著序文跋文

行人行歌……………四二七

若山牧水集……………四二七

わが愛誦歌……………四二八

花咲ける曠野……………四三三

路行く人々の歌……………四三三

野原の郭公……………四三〇

## 序文跋文

渚より……………四三三

さすらひ……………四三六

遍路……………四三七

大正一萬歌集……………四三九

背景……………四四〇

生靈……………四四一

無花果……………四四三

梢の雲……………四四五

## 追悼文

|             |    |              |     |
|-------------|----|--------------|-----|
| 信濃歌選……………   | 四七 | 酒壺……………      | 四六四 |
| 加藤東籬集……………  | 四九 | ポプラのそよぎ…………… | 四六六 |
| 少年の日に……………  | 五一 | おもかげ草……………   | 四六七 |
| 燃ゆる愛欲……………  | 五三 | 峽間……………      | 四六八 |
| 遍路……………     | 五四 | 海彦山彦……………    | 四七〇 |
| 水脈……………     | 五五 | 潮みどり歌集……………  | 四七三 |
| 前田夕暮選集…………… | 五六 | 心を描く……………    | 四七四 |
| 郷愁……………     | 六一 | 耕村遺稿……………    | 四七四 |
| 搖籃……………     | 六二 | 棚雲……………      | 四七五 |

|                |     |           |     |
|----------------|-----|-----------|-----|
| 茅野昌栖……………      | 四九  | 伊藤嶺花…………… | 四九九 |
| 金子花城と鈴木菱花…………… | 四七  | 島木赤彦…………… | 五〇一 |
| 安成貞雄……………      | 四九三 | 古泉千樫…………… | 五〇二 |
| 白旗浩蕩……………      | 四九五 | 潮みどり…………… | 五〇四 |

解説……大悟法利雄……五〇七

第九卷

小説・長詩・童謡・その他

小

說

# 一 家

友人と共に夕食後の散歩から歸つて來たのは丁度七時前であつた。夏の初めにありがちのいやに蒸し暑い風の無い重々しい氣の耐へがたいまで身に迫つて來る日で、室に入つて洋燈を點けるのも懶いので、暫くは戯談口などきき合ひながら、黄昏の微光の漂つて居る室の中に、長々と寢轉んでゐた。

しばらくして友が先づ起き上つて灯を點けた。その明るさが室の内を照らし出すと、幾分頭腦も明瞭したやうで先刻途中で買つて來た菓子はつきりの袋を袂から取り出して茶道具を引寄せた。そして自分は湯を貰ひに二階から勝手に降りた。折悪しくすつかり冷え切つてゐますので沸かして持つて參ります、と宿の主婦は周章へて炭を火鉢につぐ。宿といつても此家は普通の下宿ではない、ただ二階の二間を友人と共に借切つて賄をつけて貰つてるといふ所謂素人下宿の一つである。自分等の引越して來たのはつい三ヶ月ほど以前であつた。

序でに便所に入つて、二階の室に歸つて行くと、待ち兼ねてゐたらしい友は自分の素手すでなのを

見て

「又か？」

と、眉をひそめて、苦笑を浮べる。

無言に點頭うなづいて、自分は坐つてまた横になつて、先づ菓子を頬張つた。渴き切つた咽喉を通つて行くその不味加減まずさと云つたら無い。思はずも顔をしかめざるを得なかつた。

自身にもこの經驗をやつたらしい友は、微笑みながら自分のこのさまを見守つてゐたが、  
「どうも困るね、此家こゝの細君にも。」

と低聲こゝろで言つて、

「何時いつ行つてみても火鉢に火の氣のあつたことは無い。」

と、あとは大眞面目に不足極まるといふ顔をする。

「まつたくだ。今に見給へ、また例の泥臭い生溫なまぬるの湯を持つて來るぜ。今大周章おほうろたへで井戸に駆け出して行つたから。」

「水も汲んでないのか、どうもまつたく驚くね。丁度今は夕方ぢやないか。」

「よくあれで世帯が持つて行ける。」

「行けもしないぢやないか。如何どうだい、昨夜ゆうべは。」

と言つてたまらぬやうに、ウハ、と吹き出した。續いて自分も腹を抱へて笑つた。

昨夜の矢張り今の頃、酒屋の番頭が小僧をつれて、先々月からの御勘定を今日こそはといふので今まで幾十度となく主人の口車に乗せられて取り得なかつた金を催促に押しかけて來た。丁度主人は不在だったので彼等は細君を對手に手酷く談判に及んだ折も折、今度はまた米屋の手代が、これも同じく、もう如何しても待つてはあげられませぬと酒屋が催促して居る眞最中に溢り切つてやつて來た。狭苦しい門口は以上の借金取りで、充滿になつて居るといふ騒ぎ。あれやこれやといろ／＼押問答がやや久しく續けられてゐたが、終には喧嘩かとも思はるるばかりの烈しい大聲を張り上げるやうになつて來た。殊にいつもこの事に馴れきつて居る酒屋の番頭の金切聲といふものは殆んど近邊三四軒の家までも聞え渡らうかと思はれる位で、現に三四人の子供は面白相に眼を見張り囁き交して門前に群がつて居る。こんな有様で二階に居る身も氣が氣でない。宛ら自分等があゝの亂暴な野卑な催促を受けて居るかのやうで二人とも息を殺して身を小さくして縮んでゐたのである。

折よく其處へ主人が歸つて來て、どういふ具合に斷つたものか定めし例の巧みな口前を振つたのであらう、先づ明晩まで待つて呉れといふ哀願を捧げて、辛くも三人を追ひ歸した。

其後ではまた細君を捉へて罵る主人の怒つた聲が忍びやかに聞えてゐた。

斯んなことは決して今に始まつた事でないので、僕等が此家に移つて以來、殆んど數ふるに耐へぬ程起つて居るのである。

「然し……………」

と友は笑ふのをやめて、眞面目になつて、

「然し、細君はあれが全然氣にならぬと見えるね。」

「まさか、何ぼ何だつて幾分かは……」

「いや、全然だぜ。あんなに酷い嘲罵を浴びせられても、それは實にすましたもんだよ。出来ないものは幾ら何と言つても出来ないんだからつて具合だな。全くどうも洒々たるもんだ。」

「大悟徹底といふわけなんだらう。」

「さうかも知れない、それでなくてどうして毎日々々のあの債鬼に耐へられるもんか。然し洒々と云つても何も惡氣のある洒々ではないのだよ。だからあの亭主のやうにうまく對手を丸めて歸すとか何とかいふ手段をも一つも執ることが出来ないのだね。見給へ、細君一人の時に取りに來た奴なら何時でもあんな大聲を出すやうになる……」

と言つて、また暫くして、

「いや、それが出来ないのではなからう、爲んのだらう。負債も平氣、催促も平氣、嘲罵も近隣